

源氏物語

椎が本

紫式部

青空文庫

朝の月涙のごとくましろけれ御寺みでらの鐘

の水渡る時

(晶子)

二月の二十日はつか過ぎに 兵部ひょうぶ卿きょうの宮は大和やまとの初瀬寺はせへ参詣さんけいを
あそばされることになつた。古い御宿願には相違ないが、中に宇
治という土地があることからこれが今度実現するに及んだものら
しい。宇治は憂うれき里であると名をさえ悲しんだ古人もあるのに、
またこのように心をおひかれになるというのも、八の宮の姫君た
ちがおいでになるからである。高官も多くお供をした。殿上役人
はむろんのこと、この行に漏れた人は少数にすぎない。

六条院の御遺産として右大臣の有ゆうになつてゐる土地は河かわの向こうにずっと続いていて、ながめのよい別荘もあつた。そこに往復とも中宿りの接待が設けられてあり、大臣もお歸りの時は宇治まで出迎えることになつていたが、謹慎日おんようじがにわかになつてめぐり合わせで来て、しかも重く慎まねばならぬことを陰陽師おんようじから告げられたために、自身で伺えないことのお詫あいさつびの挨拶あいさつを持つて代理が京から来た。宮は苦手にがてとしておいでになる右大臣が来ずに、お親しみの深いかおる薫の宰相中將が京から来たのをかえつてお喜びになり、八の宮邸との交渉がこの人さえおれば都合よく運ぶであらうと満足しておいでになつた。右大臣という人物にはいつも氣づまりさをにおうみや句におうみや宮はお覚えになるらしい。右大臣の息子むすこの右大弁、侍従

宰相、權中將、くろうどひようえのすけ藏人兵衛佐などは初めからお随きしていた。
みかどきさき帝も後の宮もすぐれてお愛しになる宮であつたから、世間の尊敬
 することも大きかつた。まして六条院一統の人たちは末の末まで
 私の主君のようにこの宮にかしづくのであつた。別荘には山里ら
 しい風流な設しつらい備がしてあつて、碁、すごろく双六、たぎ弾碁の盤なども出
 されてあるので、お供の人たちは皆好きな遊びをしてこの日を楽
 しんでいた。宮は旅なれぬお身からだ体であつたから疲労をお覚えにな
 つたし、この土地にしばらく休養していたいという思おぼしめ召しも十
 分にあつて、横たわつておいでになつたが、夕方になつて樂器を
 お出させになり、音樂の遊びにおかかりになつた。こうした大き
 い河のほとりというものは水音が横から樂音を助けてことさらお

もしろく聞かれた。

聖人の宮のお住居すまいはここから船ですぐに渡って行けるような場所に位置していたから、追い風に混じる琴笛の音を聞いておいでになりながら昔のことがお心に浮かんできて、

「笛を非常におもしろく吹く。だれだろう。昔の六条院の吹かれたのは愛あい嬌きょうのある美しい味のものだった。今聞こえるのは音が澄みのぼつて重厚なところがあるのは、以前の太政大臣の一統の笛に似ているようだ」

など独ひとりごと言を言っておいでになった。

「ずいぶん長い年月が私をああした遊びから離していた。人間の愉楽とするものと遠ざかった寂しい生活を今日までどれだけして

いるかというようなことをむだにも数えられる」

こんなことをお言いになりながらも、姫君たちの人並みを超えたりつぱさがお思われになつて、宝玉を埋めているような遺憾もお覚えにならぬではなく、源宰相中將という人を、できるなら婿としてみたいが、かれにはそうした心がないらしい、しかも自分はその人以外の浮薄な男へ女によおう王たちは与える気になれないのであるとお思いになつて、物思いを八の宮がしておいになるのであるが、では、春の夜といえども長くばかりお思われになるのであるが、右大臣の別荘のほうの客たちはおもしろい旅の夜の酔いごこちに夜のあつけなく明けるのを歎いていた。

匂宮はこの日に宇治を立つて帰京されるのが物足らぬこととば

かりお思われになつた。遠くはるばると霞かすんだ空を負つて、散る桜もあり、今開いてゆく桜もあるのが見渡される奥には、晴れやかに起き伏しする河添い柳も続いて、宇治の流れはそれを倒影にしていた。都人の林泉にはないこうした広い風景を見捨てて帰りがたく思召されるのである。薫はこの機会もはずさず八の宮邸へまいりたく思うのであつたが、多数の人の見る前で、自分だけが船を出してそちらへ行くのは軽率に見られはせぬかと躊躇ちゆうちよしている時に八の宮からお使いが来た。お手紙は薫へあつたのである。

山風かすみに霞吹き解く声はあれど隔てて見ゆる遠をちの白波

漢字のくずし字が美しく書かれてあつた。兵部卿の宮は、少なからぬ関心を持つておいでになる所からのおたよりとお知りになり、うれしく思召して、

「このお返事は私から出そう」

とお言いになつて、次の歌をお書きになつた。

遠をちこち近みぎはの汀の波は隔つともなほ吹き通へ宇治の川風

薫は自身でまいることにした。音楽好きな公きんだち達を誘つて同船して行つたのであつた。船の上では「酣かんすいらく醉楽」が奏された。

河に臨んだ廊の縁から流れの水面に向かつてかかっている橋の形などはきわめて風雅で、宮の洗練された御趣味もうかがわれるものであった。右大臣の別荘も田舎らしくはしてあったが、宮のやしきお邸はそれ以上に素朴な土地の色が取り入れられてあって、網あじろ代屏風びょうぶなどというものも立っていた。寂さびの味の豊かにある室内の飾りもおもしろく、あるいは兵部卿の宮の初瀬詣せうぎでの御帰途に立ち寄る客があるかもしれぬとして、よく清掃されてもあった。すぐれた名品の楽器なども、わざとらしくなく宮はお取り出しになつて、参入者たちへ提供され、一越調いちちようで「桜人」の歌われるのをお聞きになつた。名手の誉れほまをとつておいでになる八の宮の御琴の音をこの機会にお聞きしたい望みをだれも持っていたので

あるが、十三絃を合い間合い間にほかのものに合わせてだけお弾ひきになるにとどまった。平生お聞きし慣れないせいか、奥深いよい音として若い人々は承った。山里らしい御饗きようおう 応おうが綺麗きれいな形式であつて、皆人がほかで想像していたに似ず王族の端である公き達たちが数人、王の四位の年輩者というような人らが、常に八の宮へ御同情申していたのか、縁故の多少でもあるのはお手つだいに來ていた。酒しゅへい瓶びんを持つて勧める人も皆さつぱりとしたふうをしていた。一種古風な親王家らしいよさのある御歓待の席と見えた。船で來た人たちには女王の様子も想像して好奇心ひの惹ひかれる氣のしたのもあるはずである。

兵部卿の宮はまして美しいと薫から聞いておいでになつたきよう姉あね

妹^{だい}の姫君に興味をいだいておいでになつて、自由な行動のおで
きにならぬことを、今までから憾^{うら}みに思つておいでになつたので
あるから、この機会になりとも女王への初めの消息を送りたいと
お思いになり、そのお心持ちがしまいに抑^{おさ}えきれずに、美しい桜
の枝をお折らせになつて、お供に来ていた殿上の侍童のきれいな
少年をお使いにされお手紙をお送りになつた。

山桜にほふあたりに尋ね来て同じ挿頭^{かざし}を折りてけるかな

野を睦^{むつ}まじみ（ひと夜寝にける）

というような御消息である。お返事はむずかしい、自分にはと

二人の女王は譲り合っていたが、こんな場合はただ風流な交際として軽く相手をしておくべきで、あとまで引くことのないように、大事をとり過ぎた態度に出るのはかえって感じのよくないものであるというようなことを、古い女房などが申したために、宮は中姫君に返事をお書かせになつた。

挿頭かざし折る花のたよりに山やま賤がつの垣根かきねを過ぎぬ春の旅人

野を分きてしも

これが美しい貴女きじよらしい手跡で書かれてあつた。河風かわかぜも当代

の親王、古親王の隔てを見せず吹き通うのであつたから、南の岸

の楽音は古宮家の人の耳を喜ばせた。

迎えの勅使として藤大納言とうが来たほかにまた無数にまいったお迎えの人々をしたがえて兵部卿の宮は宇治をお立ちになった。若い人たちは心の残るふうに河のほうをいつまでも顧みして行った。宮はまたよい機会をとらえて再遊することを期しておいでのなるのである。一行の人々の山と水の風景を題にした作が詩にも歌にも多くできたのであるが細かには筆者も知らない。

周囲に御遠慮があつて宇治の姫君へ再三の消息のおできにならなかつたことを匂宮は飽き足らぬように思召して、それから薫の手をわずらわさずに、直接のお文ふみがしばしば八の宮へ行くことになった。父君の宮も、

「初めどおりにお返事を出すがよい。求婚者風にこちらでは扱わないでおこう。交友として無聊ぶりようを慰める相手にはなるだろう。風流男でいられる方が若い女王のいることをお聞きになつての軽い遊びの心持ちだろうから」

こんなふうにお勧めになる時などには中姫君が書いた。大姫君は遊びとしてさえ恋愛を取り扱うことなどはいとわしがるような高潔な自尊心のある女性であつた。

いつでも心細い山荘住まいのうちにも、春の日永ひながの退屈さから催される物思ひは二人の女王から離れなかつた。いよいよ完成された美は父宮のお心にかえつて悲哀をもたらしした。欠点でもあるのであれば惜しい存在であると歎かれることは少なからうがなど

と煩悶はんもんをあそばされるのであつた。大姫君は二十五、中姫君は二十三になつていた。

宮のために今年は重く謹慎をあそばされねばならぬ年と占われていた。心細い気をお覚えになつて、仏勤めを平生以上にゆるみなくあそばす八の宮であつた。この世に何の愛着をも今はお持ちにならぬお心であつたから、未来の世のためにいつさいを捨ててぶつでし仏弟子の生活にもおはいりになりたいのであつたが、ただ二女王をこのままにしておく点に御不安があつて、深い信仰はおありになつても、このことではなすべからぬ煩悶はんもんをするようになるのは遺憾であると思召すらしいのを、奉仕する女房たちはお察ししていたが、そのことについて宮は、必ずしも理想どおりではなくと

も、世間体もよく、親として、それくらいであれば譲歩してもよいと思われる男が求婚して来たなら、立ち入って婿としての世話はやかないままで結婚を許そう、一人だけがそうした生活にはいれば、それに大体のことは頼みうることもなつて安心は得られるであろうが、それほどにまで誠意を見せて婚を求める人もない。まれまれにはちよつとした機会と仲介人を得て、そうした話もあるが、皆まだ若々しい人たちが一時的に好奇心を動かして、初瀬はせ、春日かすがへの中休みの宇治での遊び心のような恋こいぶみ文を送つて来る程度にとどまり、こうした閑居をあそばすだけの宮として、女王にはたいした敬意も持たず礼のない軽蔑けいべつ的な交渉をして来るのだには、その場だけの返事をすら女王にお書かせにならない。兵ひ

ようぶきよう

部卿の宮だけはどうしてもこの恋を遂げたいという熱意を持つておいでになる。これも前生の約束事であつたのかもしれない。

源宰相中將はその秋中納言になつた。いよいよはなやかな高官になつたわけであるが、心には物思いが絶えずあつた。自身の出生した初めの因縁に疑いを持つていたころよりも、真相を知つた時に始まつた過去の肉親に対する愛と同情とともに、かの世でしているであろう罪についての苦闘を思いやることが重苦しい負担に覚えられ、その父の罪の軽くなるほどにも自身で仏勤めがしたいと願われるのであつた。あの話をした老女に好意を持ち、人目を紛らすだけの用意をして常に物質の保護を怠らぬようになった。中納言はしばらく宇治の宮をお訪ねせずたずにいたことを急に思い

出して出かけた。街まちの中にはまだはいって来ぬ秋であつたが、音羽山が近くなつたところから風の音も冷ややかに吹くようになり、槇まきの尾山の木の葉も少し色づいたのに気がついた。進むにしたがつて景色けしきの美しくなるのを薫かおるは感じつつ行つた。

中納言をお迎えになつた宮は平生にも増して喜びをお見せになり、心細く思召すことを何かと多くこの人へお話しになるのであつた。お亡くなりになつたあとでは女王たちを時々たず訪ねて来てやつてほしいと思召すこと、親しんせき戚の端の者として心にとめておいてほしいと思召すことを、正面からはお言いにならぬのではあるが、御希望として仰せられることで、薫は、

「一言でも承つておきます以上、決して私はなすべきを怠る者で

はございませぬ。この世に欲望を持つことのないようにと心がけまして、世の中に対して人よりは冷淡な態度をとっておりますから、立身をいたすことも望まれません、私の生きておりますかぎりには、ただ今と変わりのない志を御家族にお見せ申したいと考えております」

とお答えしたのを、八の宮はうれしく思召し御満足をあそばされた。おそく昇のぼるころの月が出て山の姿が静かに現われた深夜に、宮は念誦ねんずをあそばしながら薫へ昔の話をお聞かせになった。

「近ごろの世の中というものはどうなっているのか私には少しもわからない。御所などでこうした秋の月夜に音楽の演奏されるのに私も侍していて、その当時感じたことですが、名人ばかりが集

まあって、とりどりの技術を發揮させる御前の合奏よりも、上手じょうずだという名のある女御にょご、更衣こういのいる局々つぼねで心の内では競争心を持ち、表面は風流に交際している人たちの曹司ぞうしの夜ふけになつて物の音の静まつた時刻に、何ということのない悩ましさを心に持つて、ほのかに弾き出される琴の音などにすぐれたものがたくさんありましたよ。何事にも女は人の慰めになることで能事が終わるほどのものですが、それがまた人を動かす力は少くないのですね。だから女は罪が深いとされているのでしよう。親として子の案ぜられる点でも、男の子はさまざま親を懊おう惱のうさせはしないだろうが、女はどうせ女で、親が何と思つても宿命に従わせるほかはないのでしようが、それでも愍然ふびんに思われて、親のためには大きな羈絆きはん

になりますよ」

と抽象論としてお言いになる言葉を聞いてもお道理至極である、どんなに女によおう王がたを御心配になつておられるかということが薫にわかるのであつた。

「あなた様のお教えのとおりに、私も苦しい羈絆を持つまいと決心してまいりましたせいですか、自身にはそうした苦しい親心というものを経験いたしませんか、ただ一つ私には音楽という愛着の覚えられるものがございまして、それによつて遁とんせい世もできずにおります。賢明な迦かしよう葉もやはりそんな心があつて舞をしたりしたものでしょうか」

などと言つて、いつぞや少し聞いた琴と琵琶の調べを今一度聞

きたいと熱心に宮へお願いする薫であつた。

家族と薫を親しくさせる第一歩にそれをさせようと思召すのか、宮は御自身で女王たちの室^{へや}へお行きになつて、ぜひにと弹奏をお勧めになつた。十三絃^{げん}の琴がほのかにかき鳴らされてやんだ。人の少ない宮の内に、身にしむ初秋の夜のわざとらしからぬ琴の音のするのは感じのよいものであつたが、女王たちにすれば、よい氣になつて合奏などはできぬと思うのが道理だと思われた。

「こんなにして御交際する初めを作つたのですから、若い子らにしばらく客人をまかせておくことにしよう」

それから宮は仏間へおはいりになるのだつたが、

「われなくて草の庵いほりは荒れぬともこの一ことは枯れじとぞ思ふ

こうしてお話のできるのもこれが最終になるような心細い感情を私はおさえることができずに、親心のたあいもないこともたくさん言つたでしょう。すまないことです」

と言つてお泣きになつた。薫は、

「いかならん世にか枯れせん長き世の契り結べる草の庵は

御所の相撲すもうなどということも済みまして、時間のできますのを待ちましてまた伺いましょう」

などと言っていた。別室で薫はあの昔語りを聞かせてくれた老女を呼び出して、悲しくもなつかしくも思われる話の続きをさせて聞いた。落ちようとする月は明るく座敷の中を照らして、薫の透き影は艶に御簾のあちらから見えた。

隣の室には奥へ寄つて女王たちがすわっていた。普通の求婚者の言葉ではなく、優雅な話題をこしらえてその人たちにも薫は話していたが、言うべき時には姫君も返辞をした。兵部卿の宮が非常に興味を持っておいでになる女性たちであるということも思つて、自分ながらもこんなに接近していながら一歩を進めようとすることをしないのは、これを普通の男と違つた点とすべきである。自然に自分への愛を相手が覚えてくれるのを急ぐこととも思われ

ないと考えているのが薫の本心であつた。しかも恋愛の成立を希望してはいないわけではないのである。こうした交際でおりふしの風物について書きかわす相手としては満足を与える女性であつたから、宿縁のために他と結婚するようなことが女王にあつては遺憾を覚えるであろう、自分の存在している以上は断じてそれはさせたくないというふうに思つていた。まだ夜の明けきらぬ時刻に薫は帰つて行つた。

心細い御様子でみずから余命の少ないふうに観じておいでになつた八の宮の御事が始終心にかかつて、忙しい時が過ぎたならまた宇治をお訪ねしたずようと薫は考へていた。兵部卿の宮も秋季のうちもみじみに紅葉見として行きたいと思召してよい機会をうかがつておい

でになった。お手紙はしばしば行く。女のほうでは真心からの恋とは認めていないのであるから、うるさがるふうは見せず、微温的に扱った返事だけは時々出していた。

秋がふけてゆくにしたがって八の宮は健康でなくおなりになって、いつもおいでになる山の寺へ行つて、念仏だけでも専念にしたいと思召しになり、女王たちにも現在の感想と、知りがたい明日についての注意などをお話しになるのであった。

「人生のそれが常で、皆死んで行かねばならないのだが、その際にも家族の上のことで、何か安心が見いだせれば、それを慰めにして悲しみに勝つこともできるものらしいが、私の場合は、このあとをだれが引き受けて行つてくれるという人もないあなたगत

を残して行くのだから非常に悲しい。けれどもこんなことに妨げられて純一な信仰を得ることができなくなれば、すべてがだめなことになって、永久の闇やみに迷っていなければなりません。

あなたがたを眼前に置きながらも死んで行く日は別れねばならないのだから、死後のことにまで干渉をするのではないが、私だけでなく、あなたがたの祖父母の方がたの不名誉になるような軽率な結婚などはしてならない。根底もない一時的な人の誘惑に引かれてこの山荘を出て行くようなことはしないようになさい。ただ自分は普通の人の運命と違った運命を持っている人間であると自分を思つて、しょうがい生涯をここで果たす気になっているがいい。その堅い信念さえ持つておれば、長いと思う人生もいつか済んでゆ

くものなのだ。ことに女であるあなたたちは、世間並みの幸福を願わずに堪え忍んでいることでいろいろと人から批難をされるよ
うなこともなく一生を過すごすがいいでしょう」

お聞きしている姫君らは、どう自分たちがなつて行くかという
ような不安さよりも、父君がお亡かくれになつては人生に片時も生き
ていられるものでないという平生からの心持ちが、こんなふうな
孤児になつての将来のことなどをお言いになることによつて、言
いようもない悲しみになつて、宮は心の中でこそ娘への愛情から
離れようと努力はしておいでになつたであらうが、明け暮れそば
にいてあたたかい手で育はぐくんでおいでになつたのであるから、にわ
かにそうした意見をお言いだしになつたのは、冷酷なのではない

が、女王たちにとつてうらめしく思われるのはもつとも見えた。

明日は寺へおはいりになるうとする日、平生のようでなくそちらこちら家の中を宮はながめまわつておいでになつた。一時的にずまい仮り住居となされたまま年月をお過なごしになつた、あまりにも簡単な建物についても、自分の亡なくなつたあとでこんな家に若い女王たちがなお辛しんぼう抱うを続けて住んでいられるであろうかとお思ひになり、宮は涙ぐみながら念誦ねんずをあそばされる御容姿にも、清楚せいそな美があつた。年をとつた女房らをお呼び出しになつて、

「私がどんな所ところにいても安心していられるように女王たちへ仕えてくれ。何事があつても初めから人目を惹ひかぬ家であつたなら、そこの娘がのちに墮落だらくしようとも問題にする者もない。自分らの

家では、それはしかしもう世間の人の眼中にはないであろうがね。ともかくもふがない墮落をしていつては御先祖にすまないのだからね。貧しい簡素な生活よりできないのはほかにもあることだから、それはいいのだ。貴族の娘は貴族らしく品位を落とさないで他の軽侮を受けない身の持ち方で終始するのが世間へ対しても、それら自身にも潔いこといさぎよだろうと思う。世間並みな幸福を得させようとしてすることも、そのとおりにならないではかえって悲惨だから、決して軽率な考えでおまえがたが女王らに過失をさせるような計らいをしてはならない」

などとお言い聞かせになった。

いよいよその朝早くお出かけになろうとする時にも、宮は女王

たちの居間へおいでになつて、

「私の留守の間を心細く思わずにお暮らしなさい。機嫌きげんよく音楽でももてあそんでいるがよい。何事も思うままにならぬ人生なのだから悲観ばかりはせずになさい」

ともお言いになり、顧みがちに寺へおいでになつたのであつた。たださえ寂しい境遇の女王たちはいつそう心細さを感じて、物思**い**ばかりがされ、明け暮れ二人はいつしよにいて話し合いながら、「どちらか一人がいなかつたらどうして暮らされるでしょう。でも明日のことはわかりませんからね。もし二人が別れてしまうことになつたらどうしましょう」

などとも言ひ、泣きも笑いもするのであつた。遊戯に属したこ

とも、勉強事もいっしよにして慰め合っていた。御寺みでらで行なつておいでになる三昧さんまいの日数が今日で終わるはずであるといつて、女王たちは父宮のお帰りになるのを待っていた日の夕方に山の寺から宮のお使いが来た。

「今朝けさから身体からだのぐあいが悪くて家のほうへ帰られぬ。風邪かぜかと思ふのでその手当てあてなどを今日きょうはしています。平生へいせい以上いじやうにあなたがたと逢あいたく思う時ときなのにあやにくなことです」

というお言葉が伝えられた。姫君たちは驚おどろきに胸むねが一時ひとときにふさがれた気きもしながら、綿わたの厚あつい宮みやのお衣服いふくを作つくらせてお送りなどした。それに続いて二、三日もまだ宮は山をお出でになることができない。

御容体を聞きに出荘から手紙の使いを出すと、

「大病にかかったとは思われない。ただどこもなく苦しいだけであるから、少しでもよろしくなれば帰ろうと思う。今はつとめて心身を安静にしようとしている」

と言葉でのお返事があつた。

あじやり阿闍梨はずつと付き添つて御看護をしていた。

「たいした御病患とは思われませんが、あるいはこれが御寿命の終わりになるのかもしれない。姫君がたのことを何も心配あそばすには及びません。人にはそれぞれ独立した宿命というものがあるのです。ごさいますから、あなた様は決して気がかりとあそばされることはないのです。ごさいます」

こう阿闍梨は言い、いよいよ恩愛の情をお捨てになることをお教え申し上げて、

「今になりまして、ここからお出になるようなことはなさらぬがよろしゅうございます」

といさめるのであつた。これは八月の二十日ごろのことであつた。深くものが身にしむ時節でもあつて、姫君がたの心には朝霧夕霧の晴れ間もなく歎なげきが続いた。有り明けの月が派は手でに光を放つて、宇治川の水の鮮明に澄んで見えるころ、そちらに向いて揚げ戸を上げさせて、二人は外の景色けしきにながめ入っていると、鐘の声がかすかに響いてきた。夜が明けたのであると思つていゝころへ、寺から人が来て、

「宮様はこの夜中ごろにお薨かくれになりました」

と泣く泣く伝えた。その一つの報しらせが次の瞬間にはあるのでないかと、気にしない間もなかつたのであつたが、いよいよそれを聞く身になつた姫君たちは失心したようになつた。あまりに悲しい時は涙がどこかへ行くものらしい。二人の女王によおうは何も言わずに俯伏うつぶしになつていた。父君の死というものも日々枕頭ちんとうにいて看護してきたあとに至つたことであれば、世の習いとしてあきらめようもあるのであるが、病中にお逢いもできなかつたままでこうなつたことを姫君らの歎くのももつともである。しばらくでも父君に別れたあとに生きているのを肯定しない心を二人とも持つていて、自分も死なねばならぬと泣き沈んでいるが、命は失

つた人にも、失おうとする人にも、左右する自由はないものであるからしかたがない。阿闍梨あじやりにはずっと以前から御遺言があつたことであるから、葬送のこともお約束の言葉どおりにこの僧が扱つてした。御遺骸になつておいでになる父君でも、もう一度見たいと姫君たちは望んだのであるが、

「今さらそんなことをなさるべきではありません。御病中にも私は姫君がたにもお逢いにならぬがよろしいと申し上げていたのですから、こうなりましてから、互いに無益むやくな執着を作ることになり、あなたがたの将来のためにもなりません」

阿闍梨は許そうとしなかつた。御臨終までの御様子を話されることによつても、阿闍梨のあまりな出世間ぶりを姫君たちは恨め

しく憎くさえ思った。

出家のお志は昔から深かった宮でおありになつたが、まったくの孤児になる姫君を置いておおきになるのが心がかりで、生きてゐる間はせめてかたわらを離れず守る父になつておいでになることで、また一方のやる瀬ない人の世の寂しさも紛らしておいでになつたのである。それも永久のことにはならなくて、生死の線に隔てられておしまいになつたことは、亡き宮のためにも、お慕いする女王がたのためにも悲しいことであつた。

かおる

薫も宇治の八の宮の^ふ讎を承つた。あまりにはかない人の命が悲しまれ、尊い人格の御方が惜しまれて、もう一度ゆつくりお話のしたかつたことが多く残つてゐるように思われて、人生の悲哀が

しみじみ痛感されて泣いた。これが最終の会見であるかもしれないとお言いになったが、いつの時にも人生のはかなさ脆もろさをお感じになっておられる方のお言葉であつたから、特別なお気持ちで仰せられるとも聞かず、このように早くその悲しい期が至るとも思わなかつたと考えると、かえすがえすも悲しかつた。阿闍梨あじやりの所へも、山荘のほうへも弔問の品々を多く薫は贈つた。こんな好意を見せる人はほかになかつたのであるから、悲しみに沈んでいながらも二人の女王は昔からもこうした好意のある補助は絶えずしてくる薫であることを思わざるをえなかつた。

普通の家の親の死でも、その場合にはこれほどの悲しいことはないように思われるのであるから、ましてただお一人を頼みにし

て今日まで来た姫君たちはどれほど深い悲しみをしていることであらうと薫は宇治の山莊を想像して、仏事のための費用などを多く阿闍梨に寄せた。やしき邸のほうへも老いた弁の君の所へというようにして金品を贈り、ずきよう誦經の用にすべき物などさえも送った。

いつも夜のままだのような暗い月日もたつて九月になった。野山の色はまして人に涙を催させることが多く、争つて落ちる木の葉の音、宇治川の響き、滝なす涙も皆一つのもののようになつて、この女王たちをますます深い悲しみの谷へ追つた。こんなふうでは、命は前生からきまつたものとは言え、そのしばらくの間さえ堪えて生きがたいことにならぬかと女房たちは姫君らを思い、心細がつていろいろに慰めようとするのであった。

この山荘にも念仏をする僧が来ていて、宮のお住みになった座敷は安置された仏像をお形見と見ねばならぬ今となつては、そこに時々伺候した人たちが忌籠りきごもをして仏勤めをしていた。

ひょうぶぎょう

兵部卿の宮からもたびたび慰問のお手紙が来た。このおり

からそうした性質のお文ふみには返事を書くこうとする気にもならず打ち捨ててあつたから、中納言にはこんな態度をとらないはずであるのに、自分だけはいつまでもよそよそしく扱われると女王を恨めしがっておいでになった。紅葉もみぢの季節に詩会を宇治でしようとにおうみや旬宮はしておいでになったのであるが、恋しい人の所が喪の家になつている今はそのかいもないとおやめになつたが、残念に思召した。

八の宮の四十九日の忌も済んだ。時間は悲しみを緩和するはずである。と宮は思召して、長い消息を宇治へお書きになった。時雨しぐれが時をおいて通って行くような日の夕方であった。

牡鹿をしか鳴く秋の山里いかならん小萩こはぎが露のかかる夕暮れ

こうした空模様の日に、恋する人はどんなに寂しい気持ちになつてゐるかを思いやつてくださらないのは冷淡にすぎます。枯れてゆく野の景色けしきも平気でながめておられぬ私です。などという文字である。

「このお言葉のように、あまりに尊貴な方を無視する態度を取り

続けてきたのですからね、何かあなたからお返事をお出しなさい」

と、大姫君は例のように中の君に勧めて書かせようとした。中の君は今日まで生きていて硯すずりなどを引き寄せてものを書くことがあろうなどとはあの際に思われなかったのである、情けなく、時というものがたってしまったではないかなどと思うと、また急に涙がわいて目がくらみ、何も見えなくなつたので、硯は横へ押しやって、

「やっぱり私は書けません。こんなふうになごろは起きてすわつたりできるようになりましたことでも、悲しみの日も限りがあるというのはほんとうなのだろうかと思うと、自分がいやになるのですもの」

と可憐かれんな様子で言つて、泣きしおれているのも、姉君の身には心苦しく思われることであつた。夕方に来た使いが、

「もう十時がだいぶ過ぎてまいりました。今夜のうちに帰れるでしょうか」

と言つてしていると聞いて、今夜は泊まつてゆくようにと言わせたが、

「いえ、どうしても今晚のうちにお返事をお渡し申し上げませんでは」

と急ぐのがかわいそうで、大姫君は自分は悲しみから超越しているというふうを見せるためでなく、ただ中の君が書きかねているのに同情して、

涙のみきりふさがれる山里は籬まがきに鹿しかぞもろ声に鳴く

という返事を、黒い紙の上の夜の墨の跡はよくも見分けられないのであるが、それを骨折ろうともせず、筆まかせに書いて包むとすぐに女房へ渡した。

お使いの男は木幡山こはたを通るのに、雨氣の空でことに暗く恐ろしい道を、臆おくびよう病でない者が選ばれて来たのか、氣味の悪い籬さきは原道らを馬もとめずに早打ちに走らせて一時間ほどで二条の院へ帰り着いた。御前へ召されて出た時もひどく服の濡ぬれていたのを宮は御覽になつて物を賜わつた。

これまで書いて来た人の手でない字で、それよりは少し年上らしいところがあり、才識のある人らしい書きぶりなどを宮は御覧になつて、しかしどちらが姉の女王か、中姫君なのかと熱心にながめ入つておいでになり、寢室へおはいりにならないで起きたまままでいらせられる、この時間の長さに、どれほどお心にしむお手紙なのであろうなどと女房たちはささやいて反感も持った。眠たかつたからであらう。

兵部卿の宮はまだ朝霧の濃く残つてゐる刻にお起きになつて、また宇治への消息をお書きになつた。

朝霧に友惑はせる鹿の音を大方にやは哀れとも聞くね

私の心から発するものは二つの鹿の声にも劣らぬ哀音です。

というのである。

風流遊びに身を入れ過ぎるのも余所見よそみがよろしくない、父宮が
ついておいでになるというのを力にして、今まではそうした戯れ
に答えたりすることも安心してできたのであるが、孤児の境遇に
なつて思わぬ過失を引き起こすようなことがあつては、ああして
気がかりなふうには仰せられた自分たちのために、この世においで
にならぬ御名にさえ疵きずをおつけすることになつてはならぬと、何
事にも控え目になつている女王はどちらからも返事をしなかつた。
この兵部卿の宮などは軽薄な求婚者と同じには女王たちも見えてい

なかつた。ちよつとした走り書きの消息の文章にもお墨の跡にも美しい艶えんな趣の見えるのを、たくさんはそうした意味を扱った手紙を見てはいなかつたが、これこそすぐれた男の文ふみというものであろうとは思ひながらも、そうした尊貴な風流男につきあうことも、今の自分らに相応せぬことであるから、感情を傷つけることがあつても、世外の人のようにして超然としていようと姫君たちは思つていた。薫かおるからの手紙だけはあちらからもまじめに親切なことを多く書かれてくるのであつたから、こちらからも冷淡なふうは見せず常に返事が出された。

忌中が過ぎてから薫が訪たずねて来た。東の縁に沿つた座敷を、父宮の服喪のために一段低くした所にこのごろはいる姫君たちの所

へ来て、まず老いた弁を薫は呼び出した。悲しみに暗い日を送っている女によおう王らに近く、まばゆい感じのするほどの芳香を放つ人が来たのであつたから、きまり悪く姫君たちは思つて、言いかけられることにも返辞ができないでいると、

「こんなふうな隔てがましい扱いはなさらないで、昔の宮様が私を御待遇くださいましたように心安くさせていただけばお見舞いにまいりがいもあるというものです。柔らかいふうに氣どつた若い人たちのするようなことは経験しないものですから、お取り次ぎを中にしてでは言葉も次々に出てまいりません」

と薫は言つた。

「どうしてそれで生きていたかと思われるような私たちで、生き

てはおりましたもまだ悲しい夢に彷徨ほうこうしているばかりでござい
ます。知らず知らず空の光を見るようになりますことも遠慮がさ
れまして、外に近い所までは出られないのでございます」

という姫君の挨拶あいさつが伝えられてきた。

「それを申せば限りもない御孝心を持たれますこととは深く存じ
ております。日月の光のもとへ晴れ晴れしく御自身からお出まし
になることこそはばかりがおありになるでしょうが、私としまし
てはまた宮様をお失いたしましての悲しみをほかのだれに告げ
ようもないことですし、あなた様がたのお歎きの慰みにもなるこ
とも申し上げたいものですから、しいて近くへお出ましを願つて
いるわけです」

こう薫が言うと、それを取り次いだ女房が、

「あちらで仰せになりますとおりに、お悲しみにお沈みあそばすのをお慰めになりたいと思召す御好意をおくみになりませんでは」
などと言葉を添えて姫君を動かそうとする。ああは言いながらも大姫君の心にもようやく悲しみの静まって来たこのごろになって、宮の御葬送以来薫の尽くしてくれたいろいろな親切がわかっているのであるから、亡き父宮への厚情からこんな辺鄙な土地へまで遺族を訪ねてくれる志はうれしく思われて、少しいざつて出た。薫は大姫君に持っている愛を語り、また宮が最後に御委託の言葉のあったのなどをこまごまとなつかしい調子で語っていて、荒く強いふうなどはない人であるからうとましい気などはしない

のであるが、親兄弟でない人にこうして声を聞かせ、力にさせたよるように思われるふうになるのも、父君の御在世の時にはせずとよいことであつたと思うと、大姫君はさすがに苦しい気がして恥ずかしく思われるのであつたが、ほのかに一言くらいの返辞を時々する様子にも、悲しみに茫然ぼうぜんとなつてゐるらしいことが思われるのに薫は同情していた。御簾みすの向こうの黒い几帳きちようの透すき影が悲しく、その人の姿はまして寂しい喪の色に包まれていることであらうと思ひ、あの隙見すきみをした夜明けのことと思ひ比べられた。

色変はる浅茅あさぢを見ても墨染めにやつるる袖そでを思ひこそやれ

これをひとりごと独言のように言う薫であつた。

色変はる袖をば露の宿りにてわが身ぞさらに置き所なき

はずるる糸は（侘わび人の涙の玉の緒とぞなりぬる）とだけ、あとの声は消えたまま非常に悲しくなつたふうで奥へはいつたことが感じられた。それをひきとめて話し続けうるほどの親しみは見せがたい薫は、身にしむ思いばかりをしていた。老いた弁が極端に変わった代理役に出て来て、古い昔のこと、最近に昔となつた宮のことを混ぜていずれも悲しい思いを薫に与える話ばかりをし

た。自身にかかわる夢のような古い秘密に携わった女であつたから、醜く衰えた女と毛ぎらいもせず薫は親しく向き合つていたのであつた。

「私は幼年時代に院とお別れした不幸な者で、悲しいものは人生だとその当時から身にしみ渡るほど思い続けているのですから、おとな大人になつていくにしたがつて進んでいく官位や、世間から望みをかけられていることなどはうれしいこととも思われないので。私の願うのはこうした静かな場所に閑居のできることでしたから、八の宮の御生活がしつくり私の理想に合つたように思つて近づきたてまつつたのですが、こんなふうに悲しく一生をお終わりになつたので、また人生をいとわしいものに思うことが深くなつたの

です。しかしあとの御遺族のことなどを申し上げるのは失礼ですが、自分が生きていくのに努力してでも御遺言をまちがいなく遂行したい心にはなっています。なぜ私が努力を要するかと言いますと、思いも寄らぬ昔話をあなたがお聞かせになったものからです、いつそうこの世に跡を残さない身になりたい欲求が大きくなつたのです」

と、薫の泣きながら言うのを聞いている弁はまして大泣きに泣いて、言葉も出しえないふうであつた。薫の容姿には柏木かしわぎの再来かと思われる点があつたから、年月のたつうちに思い紛れていた故主のことがまた新しい悲しみになつてきて、弁は涙におぼれていた。この女は柏木の大納言の乳母めのとの子であつて、父はこの

女王たちの母夫人の母方の叔父おじの左中弁で、亡くなった人だったのである。長い間田舎いなかに行つていて、宮の夫人もお亡くなりになったのち、昔の太政大臣家とは縁が薄くなつてしまい、八の宮が夫人の縁でお呼び寄せになつた人なのである。身分もたいした者でなく、奉公ずれのしたところもあるが、賢い女であるのを宮はお認めになつて、姫君たちのお世話役にしてお置きになつたのである。柏木の大納言と女にょさん三みやの宮みやに關したことは、長い月日になじんで何の隠し事もたいていは持たぬ姫君たちにも今まで秘密を打ち明けて言つてはなかつたのであるが、薫は、老人は問わず語りをするものになつているのであるから、普通の世間話のような誇張は混ぜて言わなかつたまでも、あの貴女きじよらしい貴女の二人は

知っているのであるかもしれないぬと想像されるのが残念でもあり、また気の毒な者に自分を思わせていることがすまぬようにも思われたりもした。こんなことによつても女王の一人を自分は得ておかないではならぬという心を薰に持たせることになるかもしれない。

女ばかりの家族の所へ泊まつて行くこともやましい気がして、帰ろうとしながらも薰は、これが最終の会見になるかもしれないぬと八の宮がお言いになった時、近い日のうちにそんなことになるはずもないという誤った自信を持つて、それきりお訪ねたずすることなしに宮をお失いした、それも秋の初めで、今もまだ秋ではないか、多くの日もたたぬうちに、どこの世界へお行きになったかもわか

らぬことになるとははかないことではないかと歎かれた。

別段普通の貴人めいた装飾がしてあるのでもなく簡素にお住まいをしておいでになったが、いつもきよ淨くそうじ掃除の行き届いた山荘であつたのに、荒法師たちが多く出入りして、ちよつとした隔ての物を立てて臨時の詰め所をあちこちに作っているような家に今はなつていた。念誦ねんずの室へやの飾りつけなどはもとのままであるが、仏像は向かいの山の寺のほうへ近日移されるはずであるということを知った薫は、こんな僧たちまでもいなくなつたあとに残る女王たちの心は寂しいことであろうと思うと、胸さえも痛くなつて、その人たちがあわ憐れまれてならない。

「もう非常に暗い時刻になりました」

と従者が告げて来たために、外をながめていた所から立ち上がった時に雁かりが啼ないて通った。

秋霧の晴れぬ雲井にいとどしくこの世をかりと言ひ知らすら
ん

薫の歌である。

ひようぶぎよう

兵部卿の宮に薫がお逢あいする時にはいつも宇治の姫君たちが話題の中心になった。反対されるかもしれないぬ父君の親王もおいでにならなくなって、結婚はただ女王の自由意志で決まるだけであると見ておいでになって、宮は引き続き誠意を書き送っておい

でになった。女のほうではこの相手に対しては短いお返事も書きにくいように思っていた。好色な風流男というお名がひろ拡まつて、好奇心からいいようにばかり想像をしておいでになる方へ、はなやかな世間とは没交渉のような侘わび居をするものが、出す返事などはどんなに時代おくれなものと思われるかしれぬとたん歎じているのであった。

いつとなくたつてしまうのは月日でないか、人生のはかなさもろ脆さを知りながらも、自分らに悲しい日の近づいているものとも知らずに、ただ一般的に頼みがたいものは人生であるとしていて、親子三人が別々な時に死ぬるものともせず、滅ぶのはいつしよであるようなもうそ妄想を持ち、それをまた慰めにもしていた過去を思

つてみても幸福な世を自分らは持っていたのではないが、父君がおいでになるといふことによつて、何とない安心が得られ、他から威す者おどもない、他を恐れることもないとして生きていた、それが今日では風さえ荒い音をして吹けば心がおびえるし、平生見かけない人たちが幾人も門をはいつて来て案内を求め声を受けばはつと思わせられもするし、恐ろしく情けないことの多くなつたのは堪えられぬことであると、涙の中で姉きょうだい妹が語り合つてゐるうちにその年も暮れるのであつた。

雪や霰あられの多いころはどこでもはげしくなる風の音も、今はじめて寂しい恐ろしい山住みをする身になつたかのごとく思つて宇治の姫君たちは聞いていた。女房らが話の中で、

「いよいよ年が変わりますよ。心細い悲しい生活が改まるような春の来ることが待たれますよ」

などと言っているのが聞こえる。何かに希望をつないでいるらしい。そんな春は絶対にはずである。と姫君たちは思っていた。宮が時々念仏におこもりになったために、向かいの山寺に人の出はいりすることもあつたのであるが、阿闍梨あじやりも音問おとずれの使いはおりおり送つても、宮のおいでにならぬ山荘へ彼自身は来てもかいないこととして顔を見せない。時のたつにつれて山荘の人の目にはいる人影は少なくなるばかりであつた。氣にとまらなかつた村民などさえもたまさかに訪ねたずてくれる時はうれしく思うようになった。寒い日に向かうことであるから燃料の枝とか、木の実と

かを拾い集めてささげる山の男もあつた。阿闍梨の寺から炭などを贈つて来た時に、

年々のことになっておりますのが、ただ今になりました中絶させますのは寂しいことですから。

という挨拶あいさつがあつた。冬季の僧たちのために、必ず毎年綿入れの衣服類を宮が寺へ納められたのを思い出して、女王もそれらの品々を使い託した。荷を運んで来た僧や子供侍が向かいの山の寺へ上がって行く姿が見え隠れに山荘から数えられた。雪の深く積もつた日であつた。泣く泣く姫君は縁側の近くへ出て見送つていたのである。宮はたとい出家をあそばされても、生きてさえおいでになればこんなふうに使いが常に往来ゆききすることによつて自

分らは慰められたであろう、どんなに心細い日を送つても、また父君にお逢あいのできる日はあつたはずであるなどと二人は語り合つて、大姫君、

君なくて岩のかけ道絶えしより松の雪をも何とかは見る

中の君、

奥山の松葉に積もる雪とだに消えにし人を思はましかば

消えた人でない雪はまたまた降りそつて積もつていく、うらや

ましいいまでに。

薫かおるは新年になれば事が多くて、行こうとしても急には宇治へ出かけられまいと思つて山荘の姫君がたを訪たずねてきた。雪の深く降り積もつた日には、まして人並みなものの影すら見がたい家に、美しい風ふうさい采の若い高官が身軽に来てくれたことは貴女たちをさえ感激させたのであろう、平生よりも心を配つて客の座の設けなどについて大姫君は女房らへ指さし図を下していた。喪の黒漆でない火鉢ひばちを、しまいこんだ所から取り出して塵ちりを払いなどしながらも、女房は亡き宮がこの客をどのように喜んでお迎えになつたかというようなことを姫君に申しているのであつた。みずから出て話すことはなお晴れがましいこととして姫君は躊ちゆう躇ちよしていたが、

あまりに思いやりのないように薫のほうでは思うふうであったから、しかたなしに物越しで相手の言葉を聞くことになった。打ち解けたとまではいわれぬが、前の時分よりは少し長く続けた言葉で応答をする様子に、不完全なところのない貴女らしさが見えた。こうした性質の交際だけでは満足ができぬと薫は思い、これはやや突然な心の動き方である、人は変わるものである、本来の自分はそうした方面へ進むはずではないのであるが、どうなっていくことかなどと自己を批判していた。

「兵部卿の宮が、私に御自身への同情心が欠けていると恨んでおられることがあるのです。故人の宮様が、姫君がたについて私への最後のお言葉などを、何かのついでに申し上げたのかもしれないま

せん。また女性に興味をお持ちになるお心から想像をたくましくあそばしての恋であるかもしれませぬ。私が女王にょおうがたにこの御縁談を取りなして成功させるだけの好意を示すべきであるのに、こちらでは御冷淡な態度をおとり続けになりますので、私がかえつて妨げをしているのではないかというふうにたびたび仰せられるものですから、そうしましたことは私のしたいと思うことではありませんが、また御紹介しておつれ申し上げるくらいを断然お断わりするといふふうにもまいらないのです。どうしてお手紙などをそう御冷淡にお扱いになるのでしょうか。好色な方のように世間では言うようですが、普通に恋を漁あさる方ではありません。女に對して一つの見識を立てておいでになる方ですよ。遊戯的に手紙

をおやりになる相手があさはかで、たやすく受け入れようとするのなどは軽蔑^{けいべつ}して接近されるようなこともないという話です。何事の上にも自意識が薄くてなるにまかせている人は他から勧められるままに結婚もして、欠点が目について気に入らぬところはあつても、これが運命なのであろう、今さらしかたがないと我慢して済まずでしようから、かえつてほかから見てもまじめな移り気のない男に見えもするでしょう。しかしそうでない場合もあつて、男はそのために身を持ちくずし、一方は捨てられた妻で終わるといふ悲惨なことになるのです。お心を惹^ひく点の多い女性にお逢^あいになつて、その女性が宮をお愛しするかぎりは軽々しく初めに変わった態度をおとりになるような恐れのない方だと私は思つて

います。だれもよく観察申し上げないようなことも私だけは細かくお知り申し上げている宮です。もし似合わしい御縁だと思召すようでしたら、私はこちらの者としてできるだけのことを御新婦のためにいたしましょう。ただ道が遠い所ですから奔走する私の足が痛くなることでしよう」

忠実に話し続ける薫の言葉を聞いていて、これを自分の問題であるとは思わぬ大姫君は、姉として年長者らしい、母代わりのよい挨拶あいさつがしたいと思うのであったが、その言葉が見つからないままに、

「何とも申し上げることはございません。一つのことをあまり熱心にお話しなさいますものですから、私は戸惑いをして」

と笑ってしまったのもおおようで、美しい感じを相手に受け取らせた。

「あなたの問題として御判断を願っていることではございません。そちらは雪の中を分けてまいりました志だけをお認めになつていただけばよろしいのです。先ほどの話は姉君としてお考えおきください。宮の対象にあそばされる方はまた別の方のようです。御手跡の主の不分明な点についてのお話も少し承ったことがあるのですが、あちらへのお返事はどちらの女王様がなさつていらつしやいますか」

と薫は尋ねていた。よくも自分が戯れにもお相手になつてそののちの手紙を書くことをしなかった、それはたいしたことではな

いが、こんなことを言われた際に、どれほど恥ずかしいかもしれないからと大姫君は思っていて、返辞はできないで、

雪深き山のかけはし棧道君ならでまたふみ通ふ跡を見ぬかな

こう書いて出すと、

「釈明のお言葉を承りますことはかえって私としては不安です」
と薫は言つて、

「つららとちこま駒踏みしだくやまかは山河をしる導べしがてらまづや渡らん

それが許されましたなら影さえ見ゆる（浅香山影さへ見ゆる山の井の浅くは人をわれ思もはなくに）の歌の深い真心に報いられるというものです」

といどむふうを見せた。思わぬ方向に話の転じてきたことから大姫君はやや不快になつて返辞らしい返辞もしない。俗界から離れた聖人のふうには見えぬが、現代の若い人たちのように氣どつたところはなく、落ち着いた氣安さのある人らしいと大姫君は薫を見ていた。若い男はそうあるべきであると思うとおりの人のようであつた。言葉の引つかかりのできる時々、ややもすれば薫は自身の恋を語ろうとするのであるが、氣づかないふうばかりを相手が作るために氣恥ずかしくて、それからは八の宮の御在世に

なつたころの話をまじめにするようになった。

日が暮れたならば雪は空も見えぬまでに高くなるであろうと思
う従者たちは、主人の注意を促す咳せき払いなどをしだしたために、
帰ろうとして薫は、

「何たる寂しいお住居すまいでしょう。全然山荘のような静かな家を私
は別に一つ持っております、うるさく人などは来ない所ですが、
そこへ移ってみようかとだけでも思ってくださいましたらどんな
にうれしいでしょう」

こんなことを女王に言っていた。けっこうなお話であると、片
耳に聞いて笑顔えがおを見せる女房のあるのを、醜い考え方をする人た
ちである、そんな結果がどうして現われてこようと、姫君は見も

し聞きもしていた。

菓子などが品よく客に供えられ、従者たちへは体裁のいい酒しゆく肴うが出された。いつぞや薫からもらった衣服の芳香を持ちあぐとんだ宿直とのいの侍も鬘かずらひげ髭ひげといわれる見栄みえのよくない顔をして客の取り持ちに出ていた。こんな男だけが守護役を勤めているのかと薫は見て、前へ呼んだ。

「どうだね。宮がおいでにならなくなつて心細いだろうが、よく勤めをしていてくれるね」

と優しく慰めてやった。悲しそうな顔になつて髭ひげ男おとこは泣き出した。

「何の身寄りも助け手も持たない私でございまして、ただお一方

のお情けでこの宮に三十幾年お世話になっております。若い時でさえそれでございましたから、今日になりましたはましてどこを頼みにして行く所がございましょう」

こんな話をするので、ますますみじめに見える髭男であった。

宮のお居間だったお座敷の戸を薰があげてみると、床には塵ちりが厚く積もっていたが、仏だけは花に飾られておわしました。姫君たちが看かん経きんしたあとと思われる。畳などは皆取り払われてあるのであった。御自分に出家の遂げられる日があったならと、それに薰が追隨して行くことをお許しになったことなどを思い出して、

立ち寄らん蔭かげと頼みし椎しひが本もとむなしき床になりにけるかな

と歌い、柱によりかかっている薰を、若い女房などはのぞき見かおるをしてほめたたえていた。

この近くの薰の領地の用を扱っている幾つかの所へ馬まぐさの秣などを取りにやると、主人は顔も知らぬような田舎男いなかがおおぜい隊をなさんばかりにして山荘にいる薰へ敬意を表しに来た。見苦しいことであると薰は思ったのであるが、髭男を取り次ぎにして命じることだけを伝えさせた。この邸やしきのために今夜も用を勤めるようにと莊園の者へ言い置かせて薰は山荘を出た。

一月にはもう空もうらかに春光を見せ、川べりの氷が日ごとごとに解けていくのを見ても、山荘の女王たちはよくも今まで生きて

いたものであるというような気がされて、なおも父宮の御事が偲ばれた。あの阿闍梨あじやりの所から、雪解ゆきげの水の中から摘んだといつて、芹せりや蕨わらびを贈つて来た。齋きよめの置き台の上に載せられてあるのを見て、山ではこうした植物の新鮮な色を見ることで時の移り変わりのわかるのがおもしろいと女房たちが言っているのを、姫君たちは何がおもしろいのかわからぬと聞いていた。

君が折る峰のわらびと見ましかば知られやせまし春のしるしも

雪深みぎはき汀こぜりの小芹た誰がために摘みかはやさん親無しにして

二人はこんなことを言い合うことだけを慰めにして日を送っていた。薫からもにおうみや匂宮からも春が来れば来るで、おりを過ぐさぬ手紙が送られる。例のようにたいしたこととも書かれていないのであるから、話を伝えた人も、それらの内容は省いて語らなかつた。

ひょうぶぎょう兵部卿の宮は春の花盛りのころに、去年の春のかぎし挿頭の花の歌の贈答が思い出されになるのであつたが、その時のお供をした公きんだち達などの河を渡つてお訪たずねした八の宮の風雅な山荘を、宮がこうきよ薨去になつてあれきり見られぬことになつたのは残念である。と口々に話し合つていた時にも、宮のお心は動かさずにいるはずもなかつた。

つてに見し宿の桜をこの春に霞隔かすみてず折りて挿頭かざさん

積極的なこんなお歌が宮から贈られた時に、思いも寄らぬことを言っておいでになるとは思ったが、つれづれな時でもあったから、美しい文字で書かれたものに対し、表面の意にだけむくいる好意をお示しして、

いづくとか尋ねて折らん墨染めに霞こめたる宿の桜を

とお返しをした。中姫君である。いつもこんなふう^に遠い所に

立つものの態度を変えないのを宮は飽き足らずに思っておいでになつた。こうしたお気持ちのついつている時にはいつも中納言をいろいろに言つて責めも恨みもされるのである。おかしく思いながらも、ひとかどの後見人顔をして、

「浮気な御行跡が私の目につく時もございますからね。そうした方であつてはと将来が不安でなくなるのでございましょう」
などと申すと、

「気に入つた人が発見できない過渡時代だからですよ」

宮はこんな言いわけをあそばされる。

右大臣は末女すえむすめの六の君に何の関心もお持ちにならぬ宮を少し怨めしがつていた。宮は親戚しんせきの中でのそれはありきたりの役

まわりをするにすぎないことで、世間体もおもしろくないことである上に、大臣からたいそうな媚扱いを受けることもうるさく、蔭かげでしていることにも目をつけてかれこれと言われるのもめんどうだから結婚を承諾する気にはなれないのであるとひそかに言っておいでになって、以前から予定されているようでありながら実現する可能性に乏しかった。

その年に三条の宮は火事で焼けて、入道の宮も仮に六条院へお移りになることがあったりして、薫は繁忙なために宇治へも久しく行くことができなかつた。まじめな男の心というものは、匂宮などの風流男とは違っていて、気長に考えて、いずれはその人をこそ一生の妻とする女性であるが、あちらに愛情の生まれるまで

は力ずくがましい結婚はしたくないと思ひ、故人の宮への情誼じようぎを重く考える点で女王にょおうの心が動いてくるようにと願つていたのであつた。

その夏は平生よりも暑いのをだれもわびしがっている年で、薫も宇治川に近い家は涼しいはずであると思ひ出して、にわか山荘へ来ることになつた。朝涼のころに出かけて来たのであつたが、ここではもうまぶしい日があやにくにも正面からさしてきていたので、西向きの座敷のほうに席をして髭ひげざむらい侍を呼んで話をさせていた。

その時に隣の中央の室へやの仏前に女王たちはいたのであるが、客に近いのを避けて居間のほうへ行こうとしているかすかな音は、

立てまいとしているが薫の所へは聞こえてきた。このままでいるよりも見ることが出来るなら見たいものであると願つて、こことの間の襖からかみ子の掛け金の所にある小さい穴を以前から薫は見ておいたのであつたから、こちら側の屏風びょうぶは横へ寄せてのぞいて見た。ちようどその前に几帳きちようが立てられてあるのを知つて、残念に思いながら引き返そうとする時に、風が隣室とその前の室との間の御簾みすを吹き上げそうになつたため、

「お客様のいらつしやる時にいけませんわね、そのお几帳をここに立てて、十分に下を張らせたらいいでしょう」

と言ひ出した女房がある。愚かしいことだとみずから思いながらもうれしさに心をおどらせて、またのぞくと、高いのも低いのも

も几帳は皆その御簾ぎわへ持つて行かれて、あけてある東側の襖子から居間へはいろいろと姫君たちはするものらしかった。その二人の中の一方が庭に向いた側の御簾から庇ひさしの室越まごしに、薫の従者たちの庭をあちらこちら歩いて涼をとろうとするのをのぞこうとした。濃い鈍色にびの単衣ひとえに、萱草色かんぞうの喪の袴はかまの鮮明な色をしたのを着けているのが、派手はでな趣のあるものであると感じられたもの着ている人によつてのことに違いない。帯は仮なように結び、袖そででぐち口に引き入れて見せない用意をしながら数珠じゆずを手へ掛けていた。すらりとした姿で、髪は袿うちぎの端に少し足らぬだけの長さが見え、裾すそのほうまで少しのたるみもなくつやつやと多く美しく下がっている。正面から見るのではないが、きわめて可憐かれんで、はなやかで、

柔らかかみがあつておおよ様な様子は、名高い女によいち一の宮みやの美貌びぼうもこんなのであろうと、ほのかにお姿を見た昔の記憶がまたたどられた。いぎつて出て、

「あちらの襖子は少しあらわになつていて心配なようね」

と言ひ、こちらを見上げた今一人にはきわめて奥ゆかしい貴女きじよらしさがあつた。頭の形、髪のはえぎわなどは前の人よりもいつそう上品で、艶えんなところもすぐれていた。

「あちらのお座敷には屏風びょうぶも引いてございます。何もこの瞬間にのぞいて御覧になることもございますまい」

と安心しているふうに言う若い女房もあつた。

「でも何だか気が置かれる。ひよつとそんなことがあればたいへ

んね」

なお気がかりそうに言つて、東の室まへいざつてはいる人にけだか気高
い心憎さが添つて見えた。着ているのは黒いあわせ袷かさねの一襲で、初めの
人と同じような姿であつたが、この人には人をひ惹きつけるような
柔らかさ、艶えんなところが多くあつた。また弱々しい感じも持つて
いた。髪も多かつたのがさわやいだ程度に減つたらしく裾のほう
が見えた。その色は翡翠ひすいがかり、糸をよ繕り掛けたように見えるの
であつた。紫の紙に書いた経巻を片手に持つていたが、その手は
前の人よりも細く瘦やせているようであつた。立っていたほうの姫
君が襖子の口の所へまで行つてから、こちらを向いて何であつた
か笑つたのが非常に愛あい嬌きようのある顔に見えた。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月10日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2004年3月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

権が本

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>